

映画を活用した授業実践 —ジェネリックスキルの育成に向けて—

小林 忠資

(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)

1. はじめに

ユニバーサル段階にある高等教育においては、授業の質を向上させ、学生の主体的な学習を創造することが喫緊の課題となっている。そこで、学生の意欲を喚起し、主体的な学びを創造するための方法として、映像を用いた授業実践が注目されている。

映像の種類は多様であるが、本発表では映画を取り上げる。映画は視聴者にとって魅力的な素材であり、有名な映画であれば国際的にも共有できる素材である。この映画という魅力的な素材をいかにして優れた教材に変換できるのかが教育上の課題と言える。

本発表では、学生のジェネリックスキルの育成を目的とした映画を活用した授業実践について報告する。そして、ジェネリックスキルの育成における、映画を教材として活用することの可能性と課題について、学生のコメントから考察する。

2. 先行研究の検討

授業で映画を活用することの意義については、多くの研究で指摘されている。山口は、映画を教材として用いることの長所として次の7点を挙げている(山口、2004)。第1に、実際に見たり経験するのが困難なことを、映画をとおして知ることができる。第2に、分かりやすい事例を提示したり、モデル化をはかることで、学習への興味・理解を促すことができる。第3に、繰り返し視聴できる。第4に、目標となる情報だけでなく、学習者の多様な考えを誘発する情報が含まれている。第5に、感情を強く喚起することができる。第6に、情報に関する共通の認識を持つことができる。第7に、映像文化に対する興味や理解力を育てることができる。また、Champoux (1999)

は、映画の教材としての機能として、事例、体験、隠喩、風刺、象徴、意味、経験、時間の8つを挙げている。映画は多様な機能を備えているがゆえに、様々な学習活動に活用できる。

学問分野別にみると、映画を教材として積極的に活用している分野として、医療・看護分野がある。たとえばアメリカでは、"Cinema (映画)"、"Medicine (医学)"、"Education (教育)"の単語を組み合わせた Cinemeducation というキーワードが存在しており、映画を教材とした医学教育について研究・教育が進められている(Alexander, 2005)。また、看護分野では、映画を教材とした授業のコンセプトとして学生中心、経験学習、反省的学習、問題解決学習の4つが挙げられている(Jina et al, 2012)。

学問分野別には一定の授業実践の蓄積がある。しかし、ジェネリックスキルの育成という観点から行われている授業実践は、多くはないと言える。本稿では、学問分野ではなく、ジェネリックスキルの育成という観点から映画を活用することの可能性について考察する。

3. 映画を活用した授業の枠組み

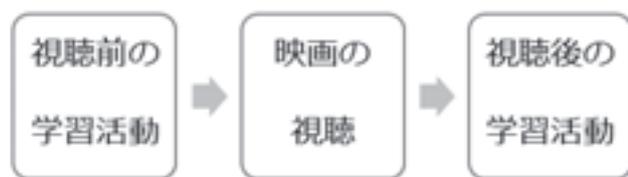
映画は学生にとって魅力的な教材であり、映画を授業で活用することで学生の授業に対する満足度を高められる。しかし、単に映画を提示するだけでは、学習目標を達成するのに効果的な教材とはならない。映画を効果的な教材とするには、学習目標に沿って学習活動を設計することが必要である。

学習を設計する上で、二つの視点が重要となる。一つは、映画を視聴するときの課題である。映画の視聴は、学生にとっての間接経験となる。その間接経験を学習に転換するための課題を提示す

ることが求められる。

課題を作成する上での枠組みとなるのが、ORID モデルである。ORID モデルは、4 種類の発問からなる発問の枠組みである。O (Objective) は、事実確認に関する質問 (何を観て、聞いたか) である。R (Reflective) は、映画を視聴して何を感じたかという感情に関する質問である。I (Interpretative) は、映画の内容をこれまでの学習とどのように関連づけたかという解釈に関する問いである。D (Descisional) は、将来どのように行動するかという意思決定についての問いである。

もう一つの視点は、映画の視聴前・後の学習活動との組み合わせである。先にも述べたように映画を単に視聴するだけでは、効果的な学習を促すことができない。映画を視聴する前・後の学習活動と映画を視聴する活動とを関連づけて学習を設計することが求められる。



4. 実践事例

本発表では、以下の2つの事例を報告する。どちらも事例も、看護専門学校の1年生40名を対象にした「コミュニケーション論」での授業実践である。「コミュニケーション論」は、カリキュラムのなかでは基礎分野「人間と生活、社会の理解」の1科目で、発表者らが担当した10時間と手話に関する授業5時間から構成されている。

全10回のテーマは、以下の通りである。

- ・看護師のコミュニケーションと指導
- ・コミュニケーションと指導の基礎理論
- ・個人とのコミュニケーションと指導
- ・集団とのコミュニケーションと指導
- ・コミュニケーションと指導の課題

1) 事例1：コミュニケーション

コミュニケーションの基礎的技法の理解を目標とした第2回の授業実践である。ロビン・ウィ

リアムス主演の「パッチ・アダムス」を教材として活用した。

視聴シーンは、医者と患者の面談シーン【5：18-6：50】である。医者が患者の話を傾聴しておらず、医療従事者のコミュニケーションとして望ましく姿が提示されている場面である。学生は、看護師と患者のコミュニケーションのとり方を理解するために、病院での基礎実習を行っていた。視聴前に、コミュニケーションで必要とされる行為について講義とその実習での学習内容を確認してから、映画シーンを視聴した。その後、視聴内容についてグループでディスカッションを行った。

2) 事例2：ファシリテーション

集団に対するコミュニケーションの技法の理解を目標とした第8回の授業実践である。中原俊監督の「12人の優しい日本人」を教材として活用した。

視聴シーンは、12人の陪審員がそれぞれの意見を主張する前半の20分である。議長がファシリテーターとしての役割を果たしていないため、ディスカッションが円滑に進まない場面が描かれている。映画を視聴する上での課題として、以下の2つを提示した。

- ・ 視聴した場面のディスカッションの特徴を挙げてください。
- ・ 視聴した場面のディスカッションをより良いものにするには、どのような工夫ができたでしょうか。

映画の視聴後、協同学習の技法の一つであるワールドカフェをもとに、ディスカッションを行った。その後、ワールドカフェでの知見をまとめるうえで、ファシリテーションの技法について講義を行った。

ポスター発表では、毎回の授業終わりに行っているアンケートをもとに、ジェネリックスキルを育成するうえで映画を活用することの可能性と課題について明らかにする。